



本が好き
自分が好き
明日が好き

東京都子ども読書活動推進資料2005

本によろこびを 子どもたちに

東京都立多摩区図書館 編



目 次

これは、子どもに本を手渡したいと願う すべての大人たちの手引きです。	1
子どもの読書は特別です。	2
もし、「子どもに本を」と考えたら	2
読書は子どもの生活の大切な一部です。	3
読書とは心にかかわる営みです。	3
子どもはおもしろいから本を読みます。	4
子どもの成長と読書	5
ことばと読書	6
本を選ぶには、二つの視点が必要です。	7
一人一人の子どもに手渡してください。	8
子どもと本を楽しむために	9
読み聞かせ	9
ストーリーテリング	12
わらべうた	13
おはなし会	14
ブックトーク	15
本のコーナーを作る	16

これは、子どもに本を手渡したいと願う すべての大人たちの手引きです。

誰もが、心のうちにその人だけの大切な子ども時代をもっています。静かに思い返すと、さまざまな思いが浮かんでくるでしょう。子どもごろのあふれるような喜び、未知への好奇心と恐怖、友達やきょうだいのぬくもり、自然への驚き、身近な人とのきずな……。その大切な思い出のなかに本はありますか？

もし、子ども時代に出会ったことで、その人の糧となったことなり、大人になっても読み返して楽しめる1冊があるとしたら、その人はなんと幸せでしょう。子ども時代の家や自然はなくなっても、本はどこかに存在し、ページを開きさえすれば再会できるからです。





子どもの読書は特別です。

子どもの読書は、大人の読書とは、まったく違います。子どもは、本の世界にまっすぐに入り、主人公と冒険をとものにします。自分のいる場所も、時も忘れ、はるかな旅をします。読み終わってから、さらに空想をふくらませ、くり返し楽しみます。しかし大人になるにつれ、まるごと本の世界に飛び込むような読み方は難しくなります。

子ども時代に読んだ本は、いつまでも覚えています。全体は忘れても、ある場面は強く心に残り、生涯その人をあたため、支えてくれます。



もし、「子どもに本を」と考えたら

今、私たちの周にいる子どもたちは、子ども時代という特別な時間を生きています。今でなければ受け取れない宝物、本との出会いを手助けするために、大人にできることがたくさんあります。

そして、どの子どもにも「これはわたしの本」と呼べる1冊と出会ってほしいと思います。

読書は子どもの生活の大切な一部です。

本を1冊も読まないことを、だめと決めつけることはできません。本とは別の世界で、打ちこめるものや喜びとなるものをもっている子どもはたくさんいます。そういう豊かな体験をもった子どもが、何かのきっかけで本を読み始めると、おう盛な読書力を見せることがあります。本は、実際の体験があつてこそ、生き生きと感じられ、登場人物にも深い共感を寄せることができるからです。

読書とは心にかかわる喜びです。

読書は一人一人の個人にかかわる喜びです。好きな本のことと、とやかく言われたくないのは、子どもも大人も同じです。「子どもの読書活動」に取り組みようとするとき、読書は個人の内面にかかわっていることをいつも心にためておきましょう。



サンタクロースの読書—子どもと本をめぐって

松岡孝子 著 ことば社

物語や絵巻のしつこい、子どもが物語を楽しみ、ことばの面白さ、子どもの読書生活に関するエッセイ。



幼年文学の世界

福田繁雄 著 岩波ジュニア新書

戦い・子どもの生活と本がもたらす喜び、図書館の歴史・サービスの発展など社会の発展から語っている。

子どもはおもしろいから本を読みます。

大人は、本を読むと興くなる、心がやさしくなる、知識が増えるなど、効果を考えがちです。しかし子どもが1冊の本から何を学べるかは、その子自身にゆだねられています。ある本は一人の子どもを夢中にさせます。でも別の子どもは全く興味を覚せないかもしれません。かきになるのは、その子にとって「おもしろい」かどうかです。何にしても、子どもが楽しむことは良いことです。まず子どもが「おもしろい」と思うことを大切にしてください。

子どもと本を読んでいると、時には大人が思いもよらない深い洞察力を見せたり、鋭い観察力を発揮したりして、私たちを驚かせます。子どもは、大きくなりたい、成長したいと願っています。だから自分を高めてくれる本が直感的に分かり、大人の及ばぬ深い感性で真実を見抜くのです。

私たちは、これから成長していく人たちに、誠実に向き合い、これまでの人間の文化的な財産である、本とおぼなしのなかから最高のものを手渡したいと思います。



おどろきの文学

中村俊子 著 中央出版新社

なぜぞうやわらわの物語が面白いか、鳥の力、動物の物語の根本などについて語った読後記集。



子どもの成長と絵本

中村俊子 著 大和書房

子どもの成長に絵本が大きな力をもつことを海峽の対岸から具体的に述べている。巻末に絵本のリストを掲載。

子どもの成長と読書

赤ちゃんは、生まれるとすぐに、大人のあたたかな呼びかけと、まなざしを授けはじめます。身近な大人の日々の呼びかけで、自分と外の世界のつながりを知り、ことばを育てていきます。

幼児期の子どもは、絵本を読んでもらうのが大好きです。楽しいから好きなのですが、絵本を通じて、この世界のさまざまな不思議を探検し、生きていることのなそをといているように思えます。

子どもは小学校へ入ると字を読めます。読えた字で本を読むのは、一年生にとって嬉しいことです。でも字を読めれば、すぐに本を読めるようになるわけではありません。読んでもらえば楽しめる本も、自分で読むと難しく思えます。子どもは、小学校全期を通じて、少しずつ、この壁を乗り越えていきます。その時間を延ばるまで、大人の手助けが必要です。

小学校高学年から中学生にかけては、読書への関心も興味の範囲も広がります。自分にふさわしい本を見つけられず、本から離れていく子どもや、読書には無関心に見えても、実は自分を広い世界に解放してくれる本を探している子どももいます。

本は、実生活とは別の世界への窓を開けてくれます。現実生活に窮乏な思いを抱いている子どもに、新しい風を送り、励ましてくれます。時間や空間を超えた人類の文化や壮大な考えを教えてくれます。だからこそ、自分の殻に閉じこもりがちな思春期の人たちに、本はよき友となります。

ことばと読書

どのようなことばの環境で育ったかは、子どもが本に喜びを見出すかどうか、大きな影響を与えます。

私たちは、さまざまに思いを巡らすとき、他の人とつながりをもつとき「ことば」を使います。本を読むということも、ことばなしには行えません。読書は、一つ一つのことばを受け止め、ことばが語る世界を心に描いていくことだからです。私たちは、ことばに導かれ、作家が語る不思議な世界へ、深い未知の世界へ歩いていくことができます。

日常生活のことばが、子どもの読書をする力を育て、読書が日常のことばの力を育てていきます。



子どもとことば

岡本眞子 著
岩波書店

ことばが、子どもの発達をのびかちをまねてく
ることを具体的な事例に基づき分析している。



読む力は生きる力

岡本眞子 著
岩波書店

なぜ子どもが本を読むことが大切かを具体的に説
じ、最新の研究を引用し、映画やテレビ、ゲームの
利用も視野に入れている。

本を選ぶには、二つの視点が必要です。

大人は、子どもにどんな本を選んで、手渡せばよいのでしょうか。それには、「子どもの視点」と「大人の視点」の2つが必要です。

まず、子どもの年齢や読書体験、どんなことに興味があるかを考えて、「子どもの視点」で「おもしろい」と思う本を選びます。

同時に、「大人の視点」でも選びます。子どもが1本の木だとしたら、本は園芸士のようなものです。豊かな園芸士は、時間をかけて、木をたく茂らせてくれます。冬を楽しく過ごす、と同時に、園芸士となるような本を、広い視野から判断してください。二つの視点は対立するものではなく、両立し、お互いに補いあうものです。

長年、読まれ続けた本の多くは、子どもにも喜ばれ、大人にも支持されています。まず、そういう絵本や本を読んでみてください。たくさん読むと、どんな本が子どもの心になっているのかが、分かってきます。



絵本とは何か

福田繁雄 著

日本エディタースクール出版部

子どもの楽しみと成長に資した絵本を探究した
編纂者のエッセイ。



クシュウの奇跡 — 140冊の絵本との日々

タロウ・ヨダ 著

宮本信子 訳

白水書房

長い間方のあるクシュウが、絵本によって、大人
と心を通わせ、同様の世界を知っていく過程を記録
したもの。

一人一人の子どもに手渡してください。

さまざまな環境で育ち、個性の違った子どもたちを一言に本の世界に導くのは難しいことです。一人一人の子どもに合った本の開け方があるはずです。先生が紹介した1冊が、本のおもしろさを知らせてくれることもあります。ボランティアの人が読み聞かせた絵本が、忘れられない1冊になるかもしれません。

一人一人の大人が、一人一人の子どもの心の扉をたたき、本を手渡してください。子どもは、大人の助けによって本に出会えるのです。

えほんのせかいこどものせかい

絵西孝子 著

日本エディタースタール出版部

絵本の読み聞かせのガイドブック。絵本を読むとき子どもの心にどんな事が起きているかを具体的な作品を通して語る。グループでの読み聞かせリストを掲載。





子どもと本を楽しむために

子どもと本を楽しむには、いくつかの方法があります。

読み聞かせ

読み聞かせとは、絵本や物語を読んで聞かせることです。子どもは、家族など親しい大人に読んでもらうことが大好きです。保育園や児童館、学校などで、ほかの大人に読んでもらうのも楽しい体験となります。一人では聞けない子どもも、友達といっしょだと、しっかり聞けることがあります。

読み聞かせで、大切なことは、読み手がおもしろいと思う本を、楽しい気持ちで読むことです。読み手の思いが自然に声にこめられ、聞き手の子どもたちにも伝わります。

どう読むかよりも何を読むかの方が重要です。そのためには、いろいろな本を読んで、どんな本がふさわしいか学んでください。

(たくさんの子どもたちに絵本を読み聞かせるには)

- 1 絵は遠くからも見えやすいもの。
- 2 文が読み聞かせるのに適当な長さで、文と挿画がっているもの。
- 3 子どもたちが床に座っているときには、読み手は椅子に座り、子どもたちが椅子に座っているときには、読み手は立つ。

4 絵本は図のようにしっかり持ち、ぐらぐらさせない。



- 5 どの子どもにも絵本が見えるか、特に両隣の子どもにも見えるかを確かめる。見えない場合には、位置をずらす。
- 6 開き手も読み手も心を落ち着かせてから、読み始める。
- 7 表紙を見せて、題を言い、見返し、表紙紙（タイトルページ）を順番に見せていき、開き手の気持ちを盛り上げる。
- 8 ページがスムーズにめくれるように、読みながらページの裏を持って準備をしておく。
- 9 後ろの子どもたちにも届く十分な声量で、自然に読む。怖れないと早口になりがちなので、気を付ける。
- 10 登場人物によって声を変えするなど、適度な演出はしなくてよい。
- 11 ページをめくると、子どもは新しく開いた絵に注意を向けるので、ひと呼吸おいてから読み始める。
- 12 本の題を言うと「それ知っている」と言ったり、途中で質問する子がいるが、その子に軽くうなずく程度で、そのまま続ける。

- 13 事前に十分練習を重ね、できたら大人の人に聞いてもらう。
- 14 読み終わったら、感想を聞いたりせずに、あいさつをして静かに終わる。
- 15 プログラムや子どもたちの様子を記録にとる。特にグループの場合は、次のプログラムの参考にするために必ず記録をとる。

子どもたちが絵本に笑ったり、反応したりすると、読み手はうれしいものです。けれど、表面的な反応に一直一量しないでください。黙ってじっと聞き、終わって深い満足のため息をついている子どもがよくいます。その子は、見た目には静かでも、心の中で大冒険をしてきたのです。読みながら子どもを観察すると、表面には現れない心の動きが見えるようになります。それを大切にしてください。

絵本だけでなく、習語や短い物語も読み聞かせると喜ばれます。学校の教室などでは、通い居の子どもには絵本の絵は見えにくいものですが、物語を読むのなら大丈夫です。目からの読書は、絵に縛られず、自由にイメージを膨らませることができるので、かえって面白い子どももいます。学校などで、長編を少しずつ読み進めるのも、楽しいでしょう。そのクラスの共通の話題や共通の文化ともなります。

読み聞かせは、大勢だけでなく、一人又は数人の子どもに行うこともできます。少人数の良い点は、いつでもどこでも気軽にできて、子どもの希望やペースに合わせてられることです。顔見知りであれば、子どもはくつろいで聞けます。たとえ初めての出会いでも、読み進むにつれて、楽しんでくれるようになります。

ストーリーテリング（おはなしを語ること）

ストーリーテリングとは、昔話などのおはなしを自分のものにして（覚えて）、直接聞き手に語ることです。

昔から世界中どこでも、年長者が各の炉辺や夏の木かげで昔話を語って、幼いものを楽しませてきました。それを聞いて育った子どもがやがて年を取り、次の世代に語り伝える。そのように昔話は、いつとほいえない時代から伝えられてきました。

現代ではそのような伝承的な語りのできる人は減っていますが、代わりに、「ストーリーテリング」（おはなし）が図書館や文庫などで行われるようになりました。ストーリーテリングは、子どもにとって楽しみとなるだけでなく、聞いたおはなしを本で読むことにつながり、耳で聞く読書から読む読書へと育つきっかけにもなります。

現代の子どもは、豊かな昔話など聞かないと思われるかもしれませんが、でも実際に語ってみると、喜んで聞きます。子どもらしい正義心を見せたり、不思議な出来事に素直に驚いたりします。昔話にこめられた生きる知恵や勇氣はうも必要であり、次の世代にさまざまな形で手渡したいものです。

ストーリーテリングをやりたいと思ったら、読書者から学ぶことをお勧めします。グループに所属し、互いに研さんをつんでいけば、やがて子どもたちに語ってきかせることができるようになります。

お話を子どもに

松岡孝子 著

日本エディター・スタイル出版部



昔ばなしとは何か

小澤俊夫 著

大和書房



わらべうた

ここで取り上げる「わらべうた」は、親から子へ、あるいは遊びのなかで子どもから子どもへと伝えられてきた伝承的な子どものうたのことです。「いないいないばあ」や「おつむでんてん」、「ずいずいずっころばし」など、今でも親しまれているものもありますが、多くは忘れ去られています。

今でも幼い子どもは、わらべうたを唱えます。ゆったりとした2拍子のリズム、単純なメロディの繰り返しや不思議な音の響きが、耳にも体にも心地よいからです。わらべうたには、うたってくれる大人と子どもが互いに心を通わせながら、ことばを育てていく力があります。忙しく、人工的な音に満ちた現代だからこそ、自然な肉声でうたわれるわらべうたが大切です。

大人がもう一度わらべうたを学んで、子どもたちに返していく試みが、あちこちで行われています。おはなし会などでも取り入れられています。母からわらべうたを楽しんだ子どもは、その心地よさの延長で絵本にも親しむことができるようになります。



にはんのわらべうた！—4

近藤信子 著 柳生弘一郎 絵 福音館書店



あがりめさがりめ
—おかあさんと子どものあそびうた

ましまがつこ 編 こぐま社

おはなし会

おはなし会とは、読み聞かせやストーリーテリングなどを組み合わせて、聞き手に本に親しんでもらう会のことです。

聞き手の年齢に幅がある場合は、大きい子どもと小さい子どもに分けた方が、それぞれにふさわしい絵本やストーリーテリングを楽しむことができます。満足します。

プログラムは、聞き手の年齢や読書経験を考えて、組みます。主役である子どもが楽しめように心がけてください。特に大勢で企画すると、盛りだくさんになりがちなので、気を付けましょう。

プロのような演出より、素朴なストーリーテリングや読み聞かせの方が、子どもの心にもっとくっ附きます。今の子どもは、聞かないのではと心配せずに、子どもの力、おはなしの力を信じてください。

乳幼児向けのおはなし会では、赤ちゃんと保護者がいっしょに、絵本の読み聞かせやわらべうたを楽しみます。大切なことは、赤ちゃんと保護者が、そのひとときを楽しみ、互いのきずなを深めることです。絵書の第一歩というより、実践をやりとし、ことばを育める場ととらえたいものです。一人一人に呼びかけ、その要求を受けとめられるように、少人数が望ましいでしょう。子育て中の保護者にとっては、気持ちを楽しみにでき、子どもの成長を仲間とともに喜ぶ場ともなるように心を配りたいものです。



日本昔話百選

朝倉あき、朝倉あき、編著 二重堂



おはなしのろうそく 1～25

東京子ども図書館

ブックトーク

「ブックトーク」とは、本について話をする事です。本を紹介して、聞き手が読んでみようと思ったり、本全般に親しみや興味をもったりすることを目指しています。おもしろい本と出会うと、友達に勧めたくなるように、本を読む喜びを他の人と分かち合いたいという思いがブックトークの出発点です。

一般的に行われているブックトークとは、学校のクラスなど同年代の特定の集団を対象に、決められた時間内に、本を手際よく紹介することです。魅力的なタイトルを付け、そのテーマに沿って、聞き手の興味や読書能力を考えて幅広く本を選びます。本の内容を読したり、一部を読んだり、絵や写真を見せたりします。このようなブックトークは充分な準備が必要です。

学校などでその場に応じて、子どもたちに勧めたい本を1、2冊紹介することは、ずっと気軽にできます。先生が教えてくれた1冊が、本への興味につながったという人は大勢います。

また、読み聞かせのあとに、同じ主人公の活躍する続編を紹介するなど、簡単なブックトークを行うと、次の本を読みたいという気持ちが生れます。

大勢の子どもだけでなく、一人一人の子どもに本を紹介する個人的なブックトークも有効です。図案の前で迷っている子どもがいたら、これぞと思う本を紹介してみてください。

※ 参考「ブックトークの
意義とその効果的方法」
松岡享子 著
「こどもとしょかん」
(東京子ども図書館発行)
79号 1997年春に掲載

図書館でそろえたいこどもの本②
文学

日本図書館協会
「友は人」と「ノンフィクション」も
あります。



本のコーナーを作る

保育園、幼稚園、児童館、病院の待合室など子どもたちが過ごす場に、本のコーナーを設けることも役に立ちます。

実際に読んでみておもしろいと思う本を1冊ずつそろえ、きれいに並べます。本を入れ替えたり、厚紙の絵本の表紙を見せ、提示や関連の小物で飾るなど、常に手入れをして、生き生きした場にします。

本は、利用する子どもの年齢、興味や関心、利用の仕方などを考えて選びます。特に幼い子どもが利用する場合は、長年読み継がれた基本的な絵本を置いてください。年齢が高くなるほど、子どもの関心に重点を移していきます。

本が傷まないように、また所蔵が分かるように簡単に設備をします。細かい分類などは必要ないでしょう。それより読み聞かせをしたり、コーナーを魅力的に維持することを大切にしてください。

本を楽しむということは、落ち着いた時間をもつということです。ほかのことに気をとられていては、本を楽しむことはできません。大人が、まずゆったりと落ち着いた様子で子どもに向き合い、1冊の本を手渡してください。

＜著作権について＞

本や絵画には著作権があります。その作品に対して著作権者もっている権利のことです。そのため、何例も場合を除いて、著作権者から許可をとり、手書きで複製して、公の場で使うことはできません。

東京都立多摩図書館児童青少年資料係では、子どもの本や読書についての御質問、御相談をお受けしております。市の絵本、点字図書や録音図書も所蔵しています。

いつでも気軽に御利用ください。

東京都立多摩図書館

電 話 042-524-6428 (児童青少年資料係ダイヤルイン)

こども
ページ <http://www.library.metro.tokyo.jp/c>

○お近くの図書館で、子どもの本や読書について相談することもできます。また、団体貸出を行っている図書館もあります

○東京都では「東京都子ども読書活動推進資料」として、平成16年には、小学生の保護者を対象に「子どもたちに物語の読み聞かせを」を、平成17年には、乳幼児の保護者を対象に「しずかなひととき」を作成していますので、参考にしてください。

申し込み先：東京都立多摩図書館



東京都子ども読書活動推進資料2008

本のよろこびを子どもたちに

東京都教育委員会図書部編
177ページ 図表多

平成18(2006)年3月1日発行

編 集 東京都立多摩図書館

発 行 東京都教育庁生涯学習スポーツ課社会教育課

〒163-8601

東京都新宿区西新宿二丁目8番1号

電 話 03-5328-6858

ファクシリ 03-5328-1734

デザイン ムックハウス・ジュニア

R100





東京都教育委員会